

経営バイタル の強化書 KEIEI VITAL

ICTリテラシーと偽・誤情報の拡散傾向を確認し、
誤った情報を拡散しないように注意しましょう!

ICTリテラシーに係る実態調査結果



ICTリテラシーと偽・誤情報の拡散行為の間には一定の相関があり、ICTリテラシーが低いほど、偽・誤情報を拡散する傾向が高くなっています。
情報を拡散する前に、一旦立ち止まって考え、「情報・ニュースについてWEB上で検索」すること等を心がけましょう。

1 ICTリテラシーに係る実態調査結果

総務省は、7月14日、利用者のICTリテラシーに関する認識や偽・誤情報の拡散傾向の実態把握を目的に「ICTリテラシー実態調査」を実施し、その概要を公表しました※1。

この調査は、インターネットやSNSにおける、利用者のICTリテラシーに関する認識や、偽・誤情報の拡散傾向等の実態把握等を目的に令和8年5月8日～令和8年5月13日に全国47都道府県15歳以上の男女5,640名を対象にインターネット調査により実施されました。

調査の結果、下記「ICTリテラシーに関するテスト」において、5問中全問正解した人の割合は5.6%、全問不正解は39.5%となっていました。

ICTリテラシーに関するテストは全体で5問あり、各5つの選択肢のうち、正しいものを全て選択してもらう形式で出題されました(このテストは、「インターネットとの向き合い方～ニセ・誤情報にだまされないために～第2版」※2を参照し、制作されました)。

【図1】ICTリテラシーテスト

Q1 次のうち、正しいものをすべてお選びください。 a. 意図的に作られた虚偽の情報のみは、ニセ・誤情報とみなされる b. ニセ・誤情報は、内容の正確性よりも感情を刺激する要素が強い c. 面白くない情報、興味をひかない情報をニセ・誤情報と呼ぶ d. 人々の意見を正確に伝えることも、ニセ・誤情報はあり得る e. この中に正しいものはない	正解 b, d
Q2 次のうち、正しいものをすべてお選びください。 a. 一部の事実を含んでいる情報であれば、誤りを含んでいてもニセ・誤情報とはみなされない b. 企業の公式発表は、事実に基づいていない場合に信頼できる c. グラフは、作成者の意図によって異なる印象を与えることがある d. 統計データを意図的に誤解させるような形で利用したニセ・誤情報が存在する e. この中に正しいものはない	正解 c, d
Q3 次のうち、正しいものをすべてお選びください。 a. SNSの投稿内容は、世間の動きや意見を正確に表すことができる b. SNSのアルゴリズムは、特定の傾向を持つ情報を優先的に表示することがあり、それがニセ・誤情報の拡散に影響を与える可能性がある c. ネットのニュースは、ユーザーの関心や行動履歴に基づいて異なる記事が表示されることがある d. 多くの投稿では、ユーザーが関心を持つ情報が優先的に表示されるため、似たような意見ばかり目にする傾向がある e. この中に正しいものはない	正解 b, c, d
Q4 次のうち、正しいものをすべてお選びください。 a. 広く拡散されている情報は信頼性が高い b. ある情報について、その分野の専門家による事実に基づいた見解は信頼性が高い c. 情報の出典が明確でない情報は、信頼性に疑念を抱く必要がある d. 身近な人(家族や友人)からの情報は信頼性が高い e. この中に正しいものはない	正解 b, c
Q5 次のうち、正しいものをすべてお選びください。 a. 情報の出典を確認し、その信頼性が低い情報源を避けることが望ましい b. ある情報について、異なる理由や反論がある場合、それを確認することで情報の正確性をより確認できる c. 人から与えられる情報を鵜呑みにせず、自ら確認することが望ましい d. 複製したため、複製に元の1つの情報源を優先することが望ましい e. この中に正しいものはない	正解 a, b

この調査のポイントは、大きく下記3点となっています。

- 偽・誤情報を拡散した人の中で、ICTリテラシーに関するテストに全問不正解であった人の割合は48.9%に上り、拡散していない人の全問不正解の割合(24.7%)の約2倍で、ICTリテラシーと偽・誤情報の拡散行為の間には一定の相関が見られました。

- SNS上で見かけた情報・ニュースに対して拡散前に「立ち止まって考える」意向を尋ねたところ、79.2%が「立ち止まって考えると思う」と回答していました。
- 「認知バイアスを知っている」人の割合は、拡散経験がある人の方が高い(拡散経験のある人66.5%、拡散経験のない人52.3%)が、「認知バイアスを持っている実感がある」人の割合は、拡散経験がない人の方が高くなっていました(拡散経験のある人54.3%、拡散経験のない人59.3%)。

※「認知バイアス」とは、私たちが情報を見て判断するときに、無意識に起こる「考え方のくせ」のことを言い、例えば、自分の考え・好み・不安に合う情報だけを信じてしまう等を意味します。

2 ICTリテラシーに係る実態調査結果の要点

調査結果の要点は、①ICTリテラシーと偽・誤情報の拡散状況の相関性、②「立ち止まる行為」の重要性、③偽・誤情報及び「認知バイアス」に関する認識、④ICTリテラシーに関する認識・取組状況等、⑤各組織・団体に期待することに分けて記載されています。

① ICTリテラシーと偽・誤情報の拡散状況の相関性

ICTリテラシーテスト正答率と偽・誤情報の拡散状況

- 偽・誤情報の拡散経験別の正答率では、「拡散した」と回答した人の中で、全問不正解した人の割合は48.9%であり、「拡散していない」と回答し、全問不正解した人の割合(24.7%)の約2倍となっていました。
- 情報の真偽判断精度別では、判断精度が高い人ほど、正答率が高くなる傾向がありました。

偽・誤情報の真偽判断・拡散状況

- 過去に流通した偽・誤情報を見聞した人に対して、その内容の真偽を尋ねたところ、「正しい情報だと思う」「おそらく正しい情報だと思う」と回答した割合は48.4%となっていました。
- 他方、偽・誤情報に接触した人のうち、何らかの手段を用いて拡散した人の割合は20.3%で、年代別では10代が最も高い割合となっていました。

【図2】 偽・誤情報の真偽判断・拡散状況



②「立ち止まる行為」の重要性

立ち止まる意向・意向のある人の傾向

- SNS等での投稿・拡散前に一度立ち止まって考えることは偽・誤情報等の拡散抑制に有効とされていますが、SNS上で見かけた情報・ニュースに対して立ち止まって考える意向を尋ねたところ、79.2%が「立ち止まって考えると思う」と回答していました。
- また、情報の真偽判断精度が高い人ほど立ち止まって考える意向が高い傾向にあることが分かりました。

立ち止まった経験、偽・誤情報の拡散理由

- 実際に偽・誤情報に接触した人のうち、そもそも拡散しようとしなかった人は76.3%、立ち止まって考えて拡散をやめたことがあると回答した人は2.6%となっていました。
- また、偽・誤情報の拡散経験のある人に理由を尋ねたところ、「情報が重要だと感じたため」(31.4%)が最も多く、「情報が興味深かったため」(25.6%)、「情報に怒りや不安を感じ、それを表現したかったため」(20.0%)が続きました。

立ち止まった人のうち拡散経験別の傾向

- 偽・誤情報を拡散した人のうち、「立ち止まって考えずに拡散した」ケースは45.8%、「立ち止まって考えて拡散した」ケースは54.2%。「立ち止まって考えて拡散した」というケースがやや多い傾向が見られました。

立ち止まって考えた際の行動

- 立ち止まって考えた際の行動としては、「情報・ニュースについてWEB上で検索をした」という回答が最も多く、「情報・ニュースの参照元を確認した」「専門家がどのように言っているのか確認した」が続きました。
- 「立ち止まって拡散しなかった人」は「立ち止まって拡散した人」よりもいずれの行動も多い傾向が見られました。特に「立ち止まって情報・ニュースの参照元を確認した」(拡散しなかった人44.9%、拡散した人27.7%)や「立ち止まって自分の中で一度冷静に考えた」(同37.9%、22.7%)で両者の差が大きくなっていました。

【図3】 立ち止まって考えた際の行動



③ 偽・誤情報及び「認知バイアス」に関する認識

偽・誤情報等への接触可能性等

- インターネットやSNS利用時に「偽・誤情報等に触れている可能性がある」と回答した人は80.6%で、「偽・誤情報等を信じてしまう・騙されてしまう可能性がある」と回答した人は56.4%となっていました。
- また、偽・誤情報等を信じてしまう・騙されてしまう可能性がある

と感じている人ほど、情報の真偽判断精度が高い傾向にありました。

偽・誤情報等に騙されないと考える理由

- 偽・誤情報等を「自分は信じて騙されない」と回答した人に対し、その理由を尋ねたところ、「気になる情報は自分で検索して確認しているから」(38.6%)、「インターネット上の情報は参考程度にとどめ、判断の決め手にはしていないから」(37.6%)、「インターネット上の情報は誤りが多い前提で見ているから」(32.9%)が高くなっていました。

「認知バイアス」の認知・実感

- 「認知バイアス」を知っている人は40.3%で、持っている実感がある人は46.8%であった。また、「認知バイアス」を知っているまたは持っている実感がある人ほど、情報の真偽判断精度が高い傾向が見られました。
- 「認知バイアスを知っている」人の割合は、拡散経験がある人の方が高い(拡散経験のある人66.5%、拡散経験のない人52.3%)。また、「認知バイアスを持っている実感がある」人の割合は、拡散経験がない人の方が高くなっていました(拡散経験のある人54.3%、拡散経験のない人59.3%)。このことから認知バイアスは知識として知るだけでは十分ではなく、自身にも起こり得るものとして理解・自覚することが、慎重な情報判断や拡散抑制につながる可能性が示唆されました。

認知バイアス等に関する認識とICTリテラシーテスト正答率の相関関係

- 認知バイアスについて、「知っている」「持っている実感がある」「立ち止まって考えたい」「拡散しないようにしたい」と回答した人は、そうでない人に比べてリテラシーテストの正答率が高い傾向が見られました。
- ディープフェイクを「自分は見破ることができる」と回答した人は、全問不正解の割合が他の回答をした人と比べて群を抜いて高くなっていました(61.5%)。

*ディープフェイクとは、「ディープラーニング(深層学習)」と「フェイク(偽物)」を組み合わせた造語で、本物または真実であるかのように誤って表示し、人々が発言または行動していない言動を行っているかのような描写をすることを特徴とする、AI技術を用いて合成された音声、画像あるいは動画コンテンツのこと。

④ ICTリテラシーに関する認識・取組状況等

ICTリテラシーに対する自己評価

- 自分のICTリテラシーについて、平均的または平均より高いと思うと回答した人は、83.0%でした。
- ICTリテラシーの自己認識が平均以上の人の割合は、若年層ほど高い傾向にあり、年代別では10代が最も高くなっていました。

ICTリテラシー向上の取組

- ICTリテラシー向上に向けた具体的な取組を「行っていない」人は65.8%でした。
- 取組を実施しない理由としては、「取組み方が分からない」(50.4%)が最も多くなっていました。

ICTリテラシー向上のための素材・サービス

- ICTリテラシー向上に向けて取り組みやすい/効果がある素材として、「初心者向けに分かりやすくまとめた記事」「実際の事例・トラブル事例の紹介記事」「自分の理解度が分かる診断・チェックツール」が上位に並びました。
- 使いたい/ICTリテラシー向上に繋がりそうな機能・サービスとしては、「フェイクニュース注意報」「ファクトチェック結果の表示」「出典の明示」と回答した人が多くなくなっていました。

⑤ 各組織・団体に期待すること

安心できる情報社会づくりへの取組

- 安心できる情報社会づくりの主体に期待する内容としては、いずれの組織・団体に対しても「正しい情報の発信」と回答した人の割合が高く、マスメディア(63.3%)、WEBメディア(60.1%)、デジタルプラットフォーム(54.2%)が上位に並びました。

※1 ICTリテラシーに係る実態調査の結果公表(総務省)(URL: https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01ryutsu05_02000193.html)

※2 「インターネットとの向き合い方〜ニセ・誤情報にだまされないために〜第2版」(総務省)(URL: https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/special/nisegojouhou/)